



「徳川齊昭肖像画」 幕末と明治の博物館蔵

- ① 特別展 「幕末日本と徳川齊昭」 展示紹介
- ② 史料紹介展 「彰考館群像」
- ③ 史料紹介 「三種の神器」(電化製品)と自動炊飯器
- ④ トピックス

## 特別展「幕末日本と徳川齊昭」

江戸時代後半の19世紀、わが国は大きな転換点を迎つつありました。対外的には東アジアへの欧米諸国の進出、国内的には幕府、各藩の財政難や身分秩序の弛緩をあげることができます。

文政12年(1829)、水戸藩第9代藩主となった徳川齊昭は、まず藩レベルでこうした問題の克服を図っていきました。「水戸藩の天保改革」と称された一連の改革は、行財政にとどまらず、教育、軍事にまでわたる大きなスケールで展開され、幕府の天保改革にも示唆を与えたといわれています。

そして、嘉永6年(1853)のペリー来航は、彼を「攘夷の旗頭」として、水戸藩という枠を超え幕末日本の命運を握る人物の一人に押し上げていきます。条約締結や將軍継嗣問題など、日本が抱えていた困難な政治課題の解決が託されたのでした。齊昭もそうした期待に応えるべく積極的に行動していましたが、課題解決の方法をめぐって大老井伊直弼と厳しく対立、それが安政の大獄、そして桜田門外の変へとつながっていきます。そうした騒然とした世相の中、万延元年(1860)に齊昭は61年の生涯を終えます。

本展示では、幕末という時代背景のなかに齊昭の生涯を位置づけ、その歴史に果たした役割を考えたいきます。

### 藩主として 改革への挑戦

齊昭が水戸藩主に就任したころの時代背景と齊昭が進めた藩政改革を紹介します。見所は、まず藩の上屋敷の小石川邸(東京ドーム周辺)と中屋敷の駒込邸(東大本郷キャンパス周辺)の跡から、近年発掘された当時の藩士の生活を物語る品々、そして「弥生時代」の語源ともなった齊昭の「向岡記」碑文の拓本です。ともに初公開となります。

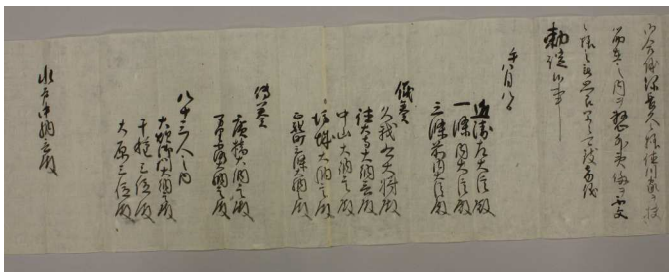


三つ葉葵紋付鬼瓦(文京ふるさと歴史館蔵)

つぎに藩政改革の中でも、軍事演習として行った追鳥狩関係の陣太鼓や旗などの資料が見所です。また、縦1.5メートル、横3メートルという巨大な偕楽園の絵図は圧巻です。

### 幕末日本の中で 「攘夷」の旗頭として

ペリー来航以降、幕府政治に深くかかわるようになった齊昭の姿を紹介します。とくに井伊直弼との関わりを国の重要文化財に指定されている「井伊家文書」から描きます。また、「桜田門外の変」の一部始終を描いた絵巻、激闘の跡が残る彦根藩士の脇差などを紹介します。天璋院や島津斉彬など齊昭と関わった人物の肖像画や写真も展示します。

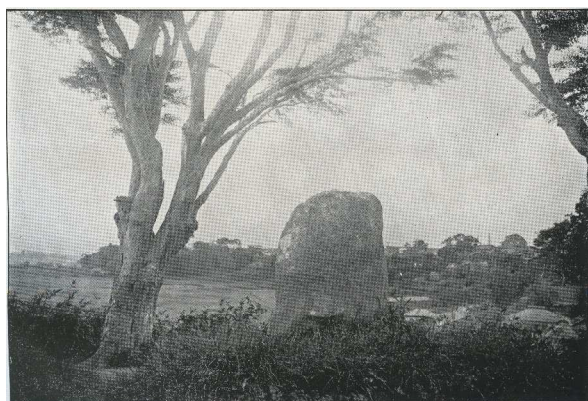


勅諭(戊午の密勅)之写(部分)(彦根城博物館蔵)

### 夫として父として

最後に、家庭人としての斉昭の姿、またその子供たちをゆかりの品々を通して紹介します。七郎麿（のちの慶喜）にあてた書状集、幕末から明治にかけて撮影された子女の肖像写真などが見所です。

**斉昭6女松姫が、盛岡藩主南部利剛に嫁ぐにあたり  
斉昭が利剛に贈った笛（岩手県立博物館蔵）**



水戸八景「太田落雁」(100年前の風景)



**斉昭とその時代がよくわかるガイドブック（図録）を刊行！（販売価格 1,000 円）**

展示品の写真と詳しい解説のほか、「水戸八景」など展示で触れられなかった斉昭の事績の写真も掲載。資料として天保年間の水戸藩士のうち 1,100 人の名前と禄高も収録しました。

**気鋭の研究者による講演会を開催！（各日とも 14 時から 16 時）**

井伊直弼と大奥，それぞれの研究の第一人者をお招きしました。広い視野から斬新な視点でのお話が聴けることと思います。

10月25日（土）母利美和氏（京都女子大学教授）「徳川斉昭と井伊直弼 対立の構造と真意」

11月9日（日）畑尚子氏（江戸東京博物館学芸員・國學院大學講師）「幕末の大奥 斉昭と天璋院」

**展示を掘り下げる「斉昭ミニ講座」と展示解説（各日とも担当は学芸部首席研究員永井博）**

より展示内容を深めたい方のために、展示と合わせてお聴き下さい。

・斉昭ミニ講座（各日とも 14 時から 15 時）

10月13日（月）斉昭時代の水戸藩邸と藩制

10月18日（土）正志斎と東湖

11月15日（土）斉昭の妻・側室・子女

11月22日（土）斉昭・慶喜父子の食と養生

・展示解説 10月12, 19, 26日 11月2, 8, 16, 23日（各日 11 時・14 時から）

### **ご注意**

講演会、斉昭ミニ講座につきましては先着 200 名様とさせていただきます。各日とも正午より整理券を配付いたします。また、展示解説は入館券が必要となります。

**映像で見る新たな弘道館の姿（2階ギャラリー）**

常磐大学水嶋研究室制作の「弘道館アーカイブズ」を展示、上映します。何回も見学された方でも見落としがちな弘道館の姿が分ることでしょう。

## 史料紹介

# 彰考館関連史料

過日開催いたしました史料紹介展「彰考館群像」には、たくさんのご来場をいただきありがとうございました。

水戸藩第2代藩主・徳川光圀によってはじめられた大日本史の編纂は、現代にいたるまで我が国最大の規模を誇る修史事業でした。明暦3年(1657)、まだ世子時代の光圀が水戸藩駒込屋敷に史局を開設してはじまったこの事業は、光圀一世の大事業であっただけでなく、その後の水戸藩の「藩業」として、約250年、水戸徳川家の代でいえば12代にわたって継続されました。この間、大日本史のうち「本紀」「列伝」の部分、250巻がいちおうの完成を見て幕府に献上されたのは、光圀の死後20年目にあたる享保5年(1720)、さらにこの刻本(版本)が刊行されたのは文化6年(1809)のことでした。そして「志」「表」の編纂が終り、完全な史書の体裁が整えられて全体が完結、大日本史紀伝志表397巻ならびに目録5巻、計402巻が朝廷に献上されたのは明治39年(1906)でした。このために費消された歳月と人的・財政的支出はまったく想像を絶するものがあります。

寛文12年(1672)春、光圀は駒込屋敷の史局を小石川上屋敷故世子綱方の旧殿に移し、彰考館と名づけました。館名は、中国晋代・杜預の「春秋左氏伝序」にある「彰往考来」(過去を明らかにして将来行ふべき道を考える)という語句から光圀みずから選んだものです。史局には光圀揮毫の「彰考館」の扁額が掲げられ、そのかたわらに五ヶ条からなる「史館警」が示されて史館員の心得としました。修史事業には藩の招きにより全国各地から様々な学派の人々が参加、光圀時代だけでもその数は130名前後に及ぶといわれています。これは光圀の「今書生を招き、以て修撰の用に供せんとす、苟も才の録すべきものあらば、何ぞ學術の同異を問ふに暇あらんや」という学派にとらわれない基本的な方針を反映したものでした。ただ、大日本史編纂事業250年を概観する時、「本紀」「列伝」における安積寛(澹泊)、「志」「表」における豊田亮(松岡)と栗田寛(栗里)、大日本史は主にこの三人によって完成されたともいわれます。光圀の悲願は水戸藩士(安積)から水戸領内の農(豊田)商(栗田)出身者の継投によって達成されたといえるかもしれません。

光圀が大日本史の歴史叙述の様式として採用した体裁は「紀伝体」といわれるものでした。これは歴史現象の総体を本紀(帝王の伝記)、列伝(個人の伝記)、志(分野別の変遷)、表(年表・人名表など)に分類して記述するもので、中国前漢・司馬遷の「史記」(紀元前90年頃完成)にはじまり、中国正史の体裁として永く後世まで行われたものでした。我が国では『日本書紀』以下の「六国史」、徳川幕府の「本朝通鑑」など、いずれも「編年体」で、「紀伝体」は光圀によってはじめて採用された歴史叙述の体裁でした。紀伝体は「一人の終始を記することは紀伝にしくはなし」(荻生徂徠「経子史要覧」)といわれるように、さまざまな人間個人の働きを通じて歴史を叙述するには極めて有効な方法でした。

一方、光圀が史員に命じた歴史叙述の方法は、正確に事実を究明して記述すれば、そのことの意味はおのずから明白となり、その事実を明らかにするためには必要な事項は繁雑をいとわずこれを記載せよというものでした。そのようにして厳正に記録された事実は「善は以て法と為すべく、悪は以て戒と為すべし、而して乱賊の徒をして懼るる所を知らしめ」(正徳五年・大日本史序)ることになるであろうというのです。このような光圀の歴史叙述構想の集中的な表現が「大日本史」の三大特筆でした。

神功皇后を后妃に列する、大友皇子を本紀に掲げ、天皇としてこれを遇する、南朝を正統とし、三種の神器が北朝の後小松天皇に渡された時をもって皇統を北朝に帰する、これが三大特筆ですが、すべて光圀の独創で、史員の反対意見に対して、「唯々此の一事、某の為に仮借せよ、天下後世、我を罪する者ありと雖も大義の存する所、我れ豈に曲筆せんや」といって自説をつらぬきとおしたといわ

れています。

以下、このような光圀の歴史構想を継承して、250年にわたり大日本史編纂にあたった主な彰考館員の叙述を紹介します。紹介します史料はすべて本館閲覧室において実際に手にとり読むことができるものです。彰考館において大日本史編纂事業にたずさわった人々の歴史への情熱をその著作を通じて実感していただければ幸甚に存じます。

(史料部歴史資料室長 桜井 明)

#### 紹介史料

1 嘉永4年版『大日本史・本紀列伝』 請求番号 / 7-25

2 列伝通例義例 請求番号 / 7-31

「列伝通例特例」(宝永4・安積寛・大井広) / 「義例測旨」(正徳元・佐治毘) / 「列女伝議」(正徳元・松浦守約) / 「加藤・神代・日置三大兄帝紀義例」(正徳元・中島為貞) / 「諡号議問・御諱議問・帝号書法」(宝永8・中島為貞) / 「修史義例」を所収。義例は大日本史の執筆に関してさまざまな書法を定めたもの。

3 往復書案 請求番号 / 7-33

大日本史編纂の史料収集のために各地に派遣された史館員と江戸の史館員との間の往復書簡や、史館が江戸・水戸に分れた後は、双方の史館員の往復書簡の案文が集録されたもの。もともと「御用書」「御用書案」「御用状」「御用状留」などと呼ばれていたものを、寛政年間初め頃、当時の彰考館総裁立原萬(翠軒)が史館記録として整備したものとされている。

4 扶桑拾葉集 請求番号 / 日5-3

古今の仮名文313点をほぼ年代順・作者別に採録して和文叢書30巻としたもの。延宝6年(1678)完成。後西上皇の題号を賜わって勅撰に准じた。延宝8年、朝廷と幕府に献上した。

5 草露貫珠 請求番号 / 15-17

古今の草書を集大成したもの。「草書の弁じ難きを慮りては草露貫珠の編あり」(義公行実)といわれる。はじめ中村立節がその選にあたったが途中で没したため、元禄元年(1688)、門人の岡谷義端が受け継ぎ、元禄8年完成した。

6 花押藪(正統) 請求番号 / 7-74・75

古記・旧文のうちから諸家の花押を集めて姓名を付し事歴を記したもの。光圀の命により丸山活堂が撰録、元禄3年(1690)に完成。さらに光圀没後の宝永5年には、光圀の遺志により、正編にもれたものを丸山活堂が撰録した「続花押藪」が完成、正編と同時に校刻された。

7 南行雑録 請求番号 / 吉7-72 小宮山楓軒自筆本

天和元年(1681)、吉弘菊潭・佐々十竹を大日本史編纂の史料調査のため、京都・奈良に派遣、寺社の旧記を閲読させ、集めて冊子としたもの。さらに、元禄2年(1689)、大串雪瀾を派遣、旧記を探索して一書としたものが「続南行雑録」、元禄5年(1692)、再び佐々十竹を派遣、得られた古文書・旧記を丸山活堂に依頼して整理し一書としたものが「又続南行雑録」。

8 東見記 人見壹(林塘) 請求番号 / 1-15

師の林羅山より聞いた「清談玉露」を集めて一冊としたもの。貞享3年刊

9 三国筆海全書 真幸忠次(筆海) 請求番号 / 15-15

日本・中国・印度の良書の著者略伝および筆跡を記録したもの。慶安5年刊

10 古今類聚常陸国誌 小宅生順(處斎) 請求番号 / 吉8-34

光圀の命により、常陸国の地誌を記録したもの。

- 11 慎終日録 小宅生順(處齋) 請求番号 / 常7-18  
光圀の命により、寛文元年(1661)藩祖頼房葬儀の始末を記録したもの。
- 12 参考保元物語 今井弘濟(魯齋) 請求番号 / 長7-50  
修史の基礎作業として重要な史書や古典の古写本を集めて校訂し定本を作成した。彰考館では諸本を校訂して本文を確定した書に「校正」、校正本を上梓した書に「校刻」、校訂者の意見を書き加えた書に「参考」を書名の冒頭に冠して区別している。
- 13 中村筆記 中村願言(篁溪) 請求番号 / 前1-4  
彰考館員および総裁として見聞したさまざまな事項を記録したもの。
- 14 義公遺事 中村願言(篁溪) 請求番号 / 長7-65  
光圀の言行・逸話また光圀の命を受けて活動した体験を、光圀死去を機として筆録したもの。
- 15 名賢詩評 鶴飼真昌(鍊齋) 請求番号 / 5-50  
中国・明の俞允著「名賢詩評」に訓点をつけたもの。「金平点」という。寛文9年刊。
- 16 井上玄桐筆記 井上玄桐(翠) 請求番号 / 7-60  
光圀歿後、侍医兼史臣として晩年の光圀に最も近い立場にあった玄桐が、安積覚(澹泊)の依頼により、光圀の西山隠居中に直接聞いたこと、また見聞したことを筆記したもの。
- 17 舜水朱子談綺 安積覚(澹泊) 請求番号 / 1-2  
初代総裁人見伝(懋齋)が朱舜水から教えられた制度・儀式の要略を冊子にまとめたものと今井弘濟(魯齋)がこれも朱舜水から聞いた事物の名称を筆記したものを、安積覚(澹泊)が光圀の命により併せ編集したもの。宝永5年刊
- 18 湖亭涉筆 安積覚(澹泊) 請求番号 / 1-5  
史書を読んで「奇事僻語」を抜き書きし、論評を加えたもの。享保12年成立。
- 19 烈祖成績 安積覚(澹泊) 請求番号 / 7-134  
藩主宗堯の命により編纂した徳川家康一代の実録。享保18年成立。
- 20 澹泊史論 安積覚(澹泊) 請求番号 / 7-119  
大日本史論賛執筆のかたわら編んだ澹泊の史論集。
- 21 新安手簡 請求番号 / 7-58 新井白石・安積澹泊 立原萬編  
のちに立原萬(翠軒)が編集した新井白石と安積澹泊の往復書簡集。
- 22 護法資治論 森尚謙(儼塾) 請求番号 / 3-13  
儒教・仏教の特質を論じたもので宝永4年成立。のち安積覚(澹泊)の批判にあう。
- 23 竹軒遺集 酒泉弘(竹軒) 請求番号 / 5-42  
竹軒の遺稿を集録したもので、それまで公けにされなかった詩文も収められている。
- 24 保建大記 栗山愿(潜峰) 請求番号 / 吉7-63  
保元から建久年間にいたる保元・平治の乱を通じて後白河法皇の得失を論じた史論。
- 25 論賛駁語 三宅緝明(観瀾) 請求番号 / 7-17  
安積覚(澹泊)の求めに応じて澹泊執筆の「論賛」について意見を述べたもの。
- 26 中興鑑言 三宅緝明(観瀾) 請求番号 / 7-95  
南北朝時代を概観し、建武中興と後醍醐天皇の得失を論じた史論。
- 27 撲斎正議 打越直正(撲斎) 請求番号 / 吉9-30  
総裁として「本紀」「列伝」校訂作業の内容について論じたもの。安積覚(澹泊)の同意を得る。
- 28 東遷基業 佐久間健(立斎) 請求番号 / 7-24  
徳川家康一代の偉績を記録したもの。享保17年成立。
- 29 後楽園志并詩賦 名越克敏(南溪) 請求番号 / 常5-3

小石川藩邸内後樂園の景勝を記し、諸家の詩歌を収録したもの。

- 30 瑤谿先生文纂・同詩纂 青山延彝(瑤谿) 請求番号 / 5-25  
瑤谿の文章・詩文を集録した文集。
- 31 農政纂要 大場景明(南湖) 請求番号 / 長9-35  
水戸藩の検地・高盛・検見・年貢について必要な計算法を示した民政担当者向けの実用書。
- 32 此君堂文集 立原萬(翠軒) 請求番号 / 5-31 岡沢稲里写
- 33 此君堂詩集 立原萬(翠軒) 請求番号 / 5-32  
立原萬(翠軒)は此君堂また東里と号した。その文章と詩文を集録したもの。
- 34 郷党遺聞 立原萬(翠軒) 請求番号 / 長7-58  
水戸の旧事を記録し、水戸に関する旧記を収録したもの。
- 35 西山遺聞 立原萬(翠軒) 請求番号 / 長7-66  
従来の言行録や逸話集に採録されなかった光圀の遺事・遺文を収集・編集したもの。
- 36 東奥紀行付北越七奇 長久保玄珠(赤水) 請求番号 / 山8-51  
宝暦10年(1760)、奥州・北陸を旅行した時の紀行文。
- 37 長崎紀行 長久保玄珠(赤水) 請求番号 / 山8-52
- 38 長崎行役日記 長久保玄珠(赤水) 請求番号 / 長8-6  
明和4年(1767)、遭難して安南国に漂流した磯原村民を引き取るため長崎に行ったときの記録。
- 39 安南国漂流記 長久保玄珠(赤水) 請求番号 / 長8-12  
磯原村の漂流民から、漂流の次第、安南国の風土人情などを聞き書きしたもの。
- 40 垂統紀事 小宮山昌秀(楓軒) 請求番号 / 長7-52  
徳川家の系譜を遡り、親氏以前の事を記録したもの。
- 41 垂統大記 小宮山昌秀(楓軒) 請求番号 / 長7-53  
彰考館辞職後の立原萬(翠軒)とともに、藩主治紀に命じられて編纂した徳川家創業守成2代主従の事跡。翠軒歿後、楓軒が天保10年完成した。
- 42 藤衣 藤田一正(幽谷) 請求番号 / 吉1-23 幽谷自筆本  
藤衣は古喪服の名。親の喪にあって、居喪に関するもの古歌を集録したもの。
- 43 曆志稿 藤田一正(幽谷) 請求番号 / 吉12-4 幽谷自筆本  
分担した「志」の草稿。のち幽谷の提議により曆・天文・災祥の三志をあわせて「陰陽志」となった。
- 44 龍淵先生詩集 桜井安亭(龍淵) 請求番号 / 長5-24  
安亭(龍淵)の詩文を集録したもの。
- 45 台湾鄭氏紀事 川口長孺(緑野) 請求番号 / 吉7-67  
中国・明末の鄭成功の事跡を記録したもの。文政11年成立。
- 46 文苑遺談 青山延于(拙斎) 請求番号 / 吉5-42  
人見壹(林塘)以下数十人の彰考館員の言行を記録したもの。
- 47 皇朝史略 青山延于(拙斎) 請求番号 / 7-132 含雪楼蔵版  
はじめ「日本史略」。編年体による日本通史。文政9年刊行。
- 48 続皇朝史略 青山延于(拙斎) 請求番号 / 7-133  
応永年間より慶長年間までの約180年の日本通史。天保2年刊行。
- 49 閑聖漫録 会沢安(正志斎) 請求番号 / 1-23 水戸東壁楼刊  
邪教の害毒を詳論して世俗の喚起をうながしたもの。文久3年刊行。
- 50 草偃和言 会沢安(正志斎) 請求番号 / 吉9-41 静長官版  
年中行事・祭礼・儀礼を記録したもの。嘉永5年刊行。

- 51 六雄八将論 青山延光(珮弦) 請求番号 / 7-113  
六雄は上杉謙信、武田信玄、北条早雲、毛利元就、織田信長、豊臣秀吉、八将は蒲生氏郷、佐々成政、小早川隆景、加藤清正、加藤嘉明、黒田如水、前田利家、伊達政宗、嘉永元年刊行。
- 52 赤穂四十七士伝 青山延光(珮弦) 請求番号 / 7-122  
赤穂47義士の伝記。斉昭がその巻首に「精忠大節」の賛をよせる。嘉永4年刊行。
- 53 野史纂略 青山延光(珮弦) 請求番号 / 7-115  
安積覚(澹泊)「烈祖成績」の後を受け、二代將軍秀忠から七代家継までの歴史を叙述したもの。
- 54 明夷録・鷄鳴録 豊田亮(松岡) 請求番号 / 吉9-23  
「甲辰の国難」より筆を起し、水戸藩内抗争に至る学派軋轢の弊害を論じたもの。
- 55 北島志 豊田亮(松岡) 請求番号 / 常8-3 水戸彰考館刊  
斉昭の命により、蝦夷・千島の風土沿革を記録したもの。明治3年刊行。
- 56 大日本史音訓便蒙 栗田寛(栗里) 請求番号 / 4-5  
大日本史・紀伝にでてくる人名・事項名の読み方を例示したもの。明治8年刊行。
- 57 神祇志料 栗田寛(栗里) 請求番号 / 2-3  
「神祇志」編纂のための基礎作業を集成したもの。明治9年刊行。
- 58 国造本紀考 栗田寛(栗里) 請求番号 / 7-126  
六史のひとつ、旧事本紀(国造本紀)に考証を加えたもの。明治18年刊行。
- 59 莊園考 栗田寛(栗里) 請求番号 / 7-47  
莊園の発生から発展にいたる歴史を概観したもの。明治21年刊行。
- 60 神器考証 栗田寛(栗里) 請求番号 / 7-48 明治33  
三種の神器の由来と歴史を考証したもの。明治33年刊行。

## 主な館員の紹介

### 中村顧言(篁溪)

正保4年(1647)京都に生れ、その後江戸に出て林鷲峰に入門しました。寛文7年(1667)鷲峰の推薦により水戸家に仕えて史館編修のち小納戸役、元禄4年(1691)、彰考館総裁となり、宝永2年(1705)世子吉孚の待読に任命されました。正徳2年(1712)66歳で没しています。「大日本史」冷泉天皇から後冷泉天皇に至る間の本紀・列伝を大串雪瀾とともに担当、また「義公遺事」「韓客贈酬日記」「中村筆記」などの著作があります。

### 丸山可澄(活堂)

明暦3年(1657)久慈郡土木内村生れ、延宝2年(1674)彰考館に入り、以後享保16年(1731)に75歳で没するまで57年の長きにわたって修史事業に従事しました。この間、貞享2年(1685)には佐々十竹らと九州・中国・北陸方面、元禄4年(1691)には単独で東北方面の史料探訪に派遣されています。また、光圀の命により、諸家の花押を集録した「花押藪」の編纂にもあたりました。主な著作に「本朝姓氏類纂」「泰伯論」などがあります。

### 安積 覚(澹泊)

通称覚兵衛、明暦2年(1656)水戸城下に生れ、寛文5年(1665)江戸に出て朱舜水に学びました。天和3年(1683)に彰考館に入り、元禄6年(1692)には総裁に就任、本紀・列伝の稿本全般の校訂にあたりました。正徳4年(1716)の総裁辞任後も彰考館にあり、享保元年(1716)からは「論賛」の執筆、



同12年からは『烈祖成績』の編集を担当しました。享保18年致仕、元文2年(1737)83歳で水戸梅香の自宅に没しています。

#### 栗山 愿(潜峰)

寛文11年(1671)、山城淀藩儒者の子として生れ、貞享元年(1684)京都の桑名松雲(山崎闇齋門下)に師事しました。18歳の時、「保平綱史」を著して八条宮尚仁親王に献上、後にこれを増補したものが「保建大記」です。元禄6年(1693)彰考館に入り、27歳で総裁に就任しました。光圀の死後、「義公行実」の編述にも携わり、宝永3年(1706)36歳で没しました。主な著作には「保建大記」のほかに、「倭史後篇」「弊帚集」などがあります。

#### 打越直正(撲斎)

貞享3年(1686)、那珂湊船手方米倉秀勝の子として生れました。幼少より学問を好み、14歳の時、光圀の抜擢で格留付列史館見習となり、三宅観瀾に師事しました。正徳5年(1715)、打越家の養子となって家督を継ぎ、享保12年(1727)には小納役に進み、彰考館総裁を兼ねました。元文5年(1740)55歳で没しています。「撲斎正議」は大日本史の内容に関わる疑問点を、大先輩の安積澹泊に問い合わせた記録です。

#### 立原 萬(翠軒)

延享元年(1744)、彰考館管庫・立原蘭溪の子として生れました。号は此君堂また東里。はじめ谷田部常德(東壑)に、ついで徂徠学派の田中江南に学びました。宝暦13年江戸彰考館入り。江戸では文章を大内熊耳、唐音を細井平洲、書を松平楽山に学びました。この時期、久しく停滞していた修史事業を復活させ軌道にのせる役割を果たしています。しかし修史の編集方針をめぐる高橋広備(坦室)・藤田一正(幽谷)らと対立、享和3年彰考館を去ることとなります。文政6年(1823)歿。

#### 藤田一正(幽谷)

安永3年(1774)、水戸下谷の古着屋藤田屋の次男に生れました。通称熊之介、のち与介と改め、次郎左衛門と称しました。幼少の頃から神童の誉が高く、10歳の時、立原萬(翠軒)に入門、15歳で史館小僧として彰考館に入りました。寛政3年に「正名論」、同9年に「修史始末」、同13年に「勸農或問」を著しています。その後、大日本史の編集方針をめぐる師翠軒と対立、翠軒が彰考館を去った後、文化4年、高橋広備(坦室)とともに総裁に就任しています。文政9年(1826)歿。

#### 青山延于(拙斎)

安永5年(1776)、彰考館員・青山延彝(瑤谿)の子として生れ、通称量介、雲龍とも号しました。立原萬(翠軒)に師事、寛政6年に彰考館雇として出仕、享和2年には編修に進み、文政6年、総裁になっています。また、藩主斉脩の命により水戸徳川家の家史「東藩文献志」の編集を主宰しています。天保14年(1843)歿。主な著作に「(正)(続)皇朝史略」「文苑遺談」「明徴録」などがあります。

#### 豊田 亮(松岡)

文化2年(1805)、久慈郡坂之上村の庄屋豊田信卿の次男として生れました。字は天功、彦次郎と称しました。14歳の時、藤田一正(幽谷)の私塾青藍舎に入門、文政3年に彰考館に入りました。天保13年、わずか80日で上中下三冊の「仏事志」を書き上げ藩主斉昭を驚嘆させたといわれています。安政3年総裁に就任、「志」「表」の編纂に尽力しました。元治元年(1864)歿。主な著作に「防海新策」「北島

志」「明夷録」「鷄鳴録」などがあります。

栗田寛(栗里)

天保6年(1835)、水戸下町本6丁目の油商栗田雅文の三男に生まれました。安政5年、抜擢されて彰考館に入り、総裁豊田亮(松岡)に重用されて、「志」「表」の編纂に従事しました。明治維新後、彰考館再開とともに大日本史の校訂・刊行に尽力し、修史事業の完成に大きな功績を残しました。「本紀」「列伝」における安積覚(澹泊)、「志」「表」における豊田亮(松岡)と栗田寛(栗里)、この三人によって大日本史は完成されたともいわれます。明治32年(1899)歿。

## 「三種の神器」(電化製品)と自動炊飯機

昭和30年代、「白黒テレビ」・「電気洗濯機」・「電気冷蔵庫」という3種類の家庭電化製品を、歴代天皇に伝えられた宝物になぞらえて「三種の神器」とよびました。これらは、庶民にとって簡単には手の届かないあこがれの商品であり、新しい生活の象徴でもありました。生活の根本にかかわる道具の電化は、快適な生活を生み出すとともに、家の構造・家族の構成・女性の役割等々、家庭での生活に大きな変化をもたらしました。それはまた、地域社会や社会全体の変化にも多大な影響をあたえました。この「三種の神器」は、今では当たり前となった家電製品に囲まれた現代生活の原点を思い返すには欠かせない、貴重な資料といえます。

ひとまとめに「三種の神器」と総称されてはいますが、それぞれが普及した時期や普及の速度には差があります。その差を比べると、当時の日本の家庭で何が求められていたかがより明確に浮かび上がってきます。例えば、三種のうちで最も早い時期から売れ始めたのは「電気洗濯機」でした。内閣府の統計によると昭和30年には約10%の家庭で所有していました。同時点で「白黒テレビ」は約3%、「電気冷蔵庫」は約1%にしか達していません。主婦にとって最も厳しい労働といわれたタライと洗濯板の作業からの解放が、いかに望まれていたかがわかります。また、最も短期間で急激に普及が進んだのが「白黒テレビ」です。昭和33年での所有率は20%に達していませんでしたが、昭和34年からは年々10%を大きく超える伸び率を続け、昭和40年には約90%の家庭で所有しており、テレビは家庭生活に欠かせないものになりました。昭和34年の当時の皇太子御成婚や昭和39年の東京オリンピックのテレビ放送が大きな要因になったといわれますが、高度経済成長期における生活の余裕の現れであることは確かです。テレビの普及により、伝達される情報の量は格段に増加しましたが、家族の目はテレビに向くことが多くなり、囲炉裏やちゃぶ台に集まり互いの顔を見て過ごす時間は確実に減少していったのです。



「電気洗濯機」  
日立製作所製  
昭和32年製造  
販売価格 23,000円



「白黒テレビ」  
早川電気製  
昭和35年製造  
販売価格 58,000円



「電気冷蔵庫」  
日立製作所製  
昭和32年製造  
販売価格 62,500円

一方、「三種の神器」とは別に、日本の家庭生活に大きな変化をもたらした電化製品が昭和30年に売り出されました。自動炊飯機です。日本人が米を食べ始めてから2千年以上の時間を経て、初めて直接火を用いることなく米を炊くことができるようになったのです。まさに“食の革命”“台所革命”といえる大きな進歩でした。

昭和30年に自動炊飯機の第1号機である自動式電気釜 ER-4(6合炊)・ER-5(1升炊)が東芝から売り出され、昭和32年には月産1万台を記録し、日本全国の家庭の半分に行き渡る大ヒット商品となりました。「三種の神器」の中に含まれなかったのは、あこがれではなく必需品として普及していったことを示しており、「三種の神器」より以上に生活の近代化に重要な意味を持っていたといえるのです。

その自動炊飯機の第1号機は、茨城県出身者の努力により生み出されました。開発者である三並義忠氏の妻風美子氏は常陸大宮市の出身です。開発は、「はじめチョロチョロ、中パツパ、赤子泣いても蓋とるな」といわれた日本の伝統的飯炊き技術をデータ化することから始められ、炊飯時の温度を1分ごとに測定する実験が繰り返し行われました。実験は、妻の風美子氏が担当しました。1日20回の飯炊き、10時間以上に及ぶ実験を数ヶ月繰り返し、重要なデータが集められました。飯炊きに最適な温度と時間の把握以外にも、自動的にスイッチを切る技術、外気温が低いところでも炊ける技術等の問題を解決するため、家を抵当に入れて実験用のヤミ米を入手するなど、全財産をかけての実験が継続されました。自動炊飯機は他の家電製品とは違い、先行する外国製品を参考にすることができませんでした。そのため、3年に及ぶ開発実験の繰り返しは、経済的にも身体的にも相当な負担となり、その開発を支えた風美子氏は実験の疲れから体調を崩し、昭和34年、45歳の若さで永眠することになってしまいました。

今では大変貴重な資料である自動炊飯機の第1号機を、昨年度茨城県立歴史館に寄贈いただきました。開発した三並義忠氏の後継会社が風美子氏の出身地である常陸大宮市にあることもあり、茨城で50年間保存されてきたものです。



「自動式電気釜」  
東芝製  
昭和30年製造  
販売価格 4,500円

# トピックス

## 秋の注目行事

### 歴史館いちょうまつり 「和の文化」の祭典

開催期間 平成20年10月26日(日)～11月30日(日)

皆様に親しまれている歴史館のいちょうの黄葉の時期であるこの時期に、日本の伝統的な芸能文化活動をしている方々とともに、茶会、民話会、落語家による講座など、多様な文化を再発見できるイベントを実施します。

#### 開催イベント

11月2日(日)、3日(月・祝) 茶道フェスティバル(国民文化祭事業)

11月16日(日) 落語家による講座「江戸時代の庶民文化の再発見」

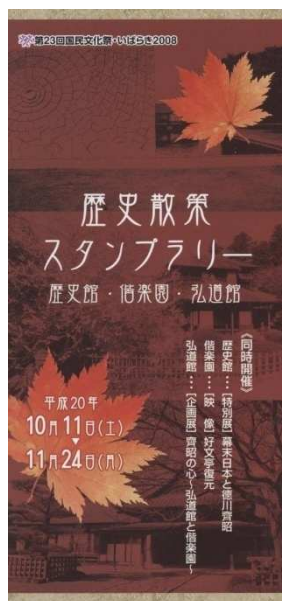
上記以外にも、イベントを開催予定です。イベント情報は後日ホームページなどで広報します。

### 歴史散策スタンプラリー

実施期間 平成20年10月11日(土)～11月24日(月)

歴史館・偕楽園・弘道館をめぐるスタンプラリーです。3つのスタンプがそろったら、記念絵はがきを進呈します。

スタンプラリーのスタート及び記念絵はがきのお受け取りは歴史館、偕楽園、弘道館のどこでもOKです。茨城県立歴史館特別展「幕末日本と徳川齊昭」にあわせて、齊昭が創設した偕楽園と弘道館をめぐる歴史散策をお楽しみください。



## 平成20年度 上半期の事業から

### 小・中学生「よろい・かぶと体験」 平成20年5月5日(月・祝)



開館前から行列ができるほどの人気で、用意した整理券は、あっという間になくなってしまいました。

体験が始まると、歴史館ボランティアの方に手伝ってもらいながら、よろいやかぶとを身にまとった子ども達は、思い思いにカメラの前でポーズをとっていました。参加者の中には、小さな子や女の子などもいました。「重くて、歩きづらいよ」という声が多く聞かれましたが、満足そうな顔からは、よろいやかぶとの着心地を十分に実感できた様子がうかがえました。

### 歴史館探検ツアー

平成20年6月8日(日)



拓本作り

22名の児童が参加し、収蔵庫や機械室、貴賓室など、普段では見ることができない歴史館の裏側を探検しました。蓄音機でレコードを聴いたり、土器の拓本作りにも挑戦したりして、歴史館ならではの体験を満喫しました。

参加した子どもたちからは「歴史館のどこの部屋で、どんなことをしているかが分かって勉強になりました。」「普通では入れない所に入れて良かったです。」「県庁の文書が段ボールにたくさんあって驚いた。」などの感想が聞かれました。

県指定文化財の旧水海道小学校を見学した後、一人一人に認定証とそれぞれが作った拓本のしおりが手渡されました。受け取ったものをうれしそうに見ている子どもたちの姿がとても印象的な場面でした。

次回は11月29日(土曜日)に実施します。



民俗収蔵庫内での説明

## 歴史教室

第1回 6月14日(土)

第2回 9月6日(土)



当館研究員が、日頃研究している成果の一端を発表するために毎年開催しているものです。今年度は4回実施しますが、第1回目は首席研究員 柳橋正雄による「間宮林蔵とシーボルト - 江戸中後期における北方情勢の渦中で - 」, 第2回目は歴史館研究専門員(委嘱) 内山俊身による「新皇・平将門の生きた世界 - 県西地域の歴史的特質を考える - 」というテーマでの発表がおこなわれました。

第3回目以降は次の予定です。

12月13日(土)「太田鉄道と水戸鉄道」  
首席研究員 木村秀弘

2月7日(土)「寛政院様御実録をよむ」  
首席研究員 笹目礼子

各回とも14:00~16:00

定員は先着200名です。

## 歴史館コンサート

第1回 平成20年6月20日(金)

第2回 平成20年9月19日(金)

スタインウェイ&サンズ社が1865年に製造したグランドピアノを用いて、年に3回コンサートを開催しています。

平成20年度 第1回(6月20日)は大竹泰夫氏(フルート)と山崎裕氏(ピアノ), 第2回(9月19日)は野田由季氏(ピアノ)による演奏があり鑑賞者はその美しい音色に酔いしれ、感動していました。

次回の「歴史館コンサート(ピアノ&ハープの演奏)」は11月21日(金), 演奏者は星子知美氏(ピアノ)と安田朋子氏(ハープ)のお二人です。



大竹氏(フルート)と山崎氏(ピアノ)



野田氏(ピアノ)

## 小・中学生いにしえのピアノ演奏体験

第1回6月21日(土)・22日(日) 2日間

第2回9月20日(土)・21日(日) 2日間



歴史館コンサートでも使用したスタインウェイ&サンズ社のグランドピアノを用いた「小・中学生いにしえのピアノ演奏体験」を、こちらも年に3回実施しています。

参加した子どもたちは、歴史あるピアノの演奏体験とあって、緊張しながらも普段ではできない貴重な体験を楽しんでいました。

次回は11月22日(土)・23日(日)に実施します。

## 歴史館ボランティアの方によるイベントが開催されました！

ちょっと昔のあそび 紙ひこうきをつくってとばそう！

平成20年7月20日(日)

午前の部、午後の部の2回実施し、合計で28名の子どもたちが参加しました。歴史館ボランティアの方に教えてもらいながら、いろいろな形の紙ひこうきを作りました。気がつくと、お父さんやお母さんの方が夢中になっていました。最後に、みんなで紙ひこうきを飛ばし、飛んだ距離を測ったり、飛んでいた時間を計ったりして、楽しく過ごしました。

参加した子どもたちからは、「いろいろな折り方が分かってよかった」「こんなに飛んでいた紙ひこうきは初めて。うれしかった」などの感想が聞かれました。

9月15日(月・祝)に、青少年会館で行われた「第3回 ユース・アイ・フェス」にも「紙ひこうきをつくってとばそう！」を出展し、多くの参加者で賑わいました。

ボランティアの方によるイベントは今後も実施予定です。





## 夏休み親子歴史教室

7月26日(土), 8月2日(土)



今年度は『戦国時代のよろい・かぶと博士になろう』というテーマで、最初に本館の主任研究員 毛塚裕之から、よろい・かぶとの基本構成や各部の名前などの説明を受けた後、実際によろい・かぶとを身につけ、着心地や重さを体験しました。

参加した子どもたちからは、「初めて着られて、うれしかった」「格好いいけど、重かった」などの感想が聞かれました。

## 歴史館まつり

平成20年8月17日(日)

歴史館まつりは、多くの方に歴史館に親しんでいただくことを目的に、毎年この時期に開催しています。

当日は、館内及び庭園内で多くのイベントが行われました。

まがたま作り体験では、親子で「まがたま作り」にチャレンジしたり、歴史館ウォークラリーでは、多くの子どもたちが庭園内の各ポイントに設置された問題を解きながら楽しそうにスタンプを集める姿がみられました。



まがたま作り体験



歴史館ウォークラリー

## テーマ展 「茨城県初代知事山岡鉄舟 - 全生庵所蔵資料から - 」

開催期間平成20年8月30日(土)～9月28日(日)

明治維新の動乱期に活躍し、茨城県の初代知事(任官名は参事)となった山岡鉄舟。剣・禅・書の達人と称され、西郷隆盛や勝海舟などとも親交があり、また、明治天皇の侍従も勤めました。

そうした山岡鉄舟の人物像や魅力について、彼が創建した東京・谷中にあるお寺「全生庵」の所蔵資料から紹介するテーマ展を開催しました。

会期中には、講演会、ギャラリートーク、歴史館寄席(落語・講談)、展示解説、演武&講演会など多くの関連行事が行われました。なかでも歴史館寄席は8月31日(日)に、五街道雲助氏による落語・『真景累ヶ淵』より「豊志賀の死」を、9月7日(日)に、一龍齋貞山氏による講談「山岡鉄舟伝」を行い、両日ともプロの落語家や講談師の出演とあって会場は満席となり、観覧した人たちは本格的な芸を目前に満喫していました。



五街道雲助氏による落語  
『真景累ヶ淵』より「豊志賀の死」



一龍齋貞山氏による講談  
「山岡鉄舟伝」

上記事業の内容及び今後の予定についてのお問い合わせは、

**茨城県立歴史館 教育普及課 電話029-225-4425**

または、ホームページの「お問い合わせ」からメールをお送りください。